



# IYEO News Avenue

～遙かなる海を越えて～

News Letter  
Vol.13  
Summer 2008

特定非営利活動法人 青少年異文化交流推進協会  
Intercultural Youth Exchange Organization (NPO) 季刊誌

Intercultural Youth Exchange Organization (NPO) Sendai Chiba Osaka Hiroshima Fukuoka Oita Miyazaki Okinawa Los Angeles Perth Wellington

## アメリカ高校交換留学 (AYA) 特集

AYA2007-2008 参加者 保護者 先生 寄稿文 アンケート  
AYA2003-2004 OB 寄稿文



### 感謝の気持ち

(AYA2007 参加者 大内麻琴 さん)

私はアメリカのミズーリ州の Marshfield という所で留学生活を送りました。Host family はお父さんの Peter、お母さんの Sue、妹の Kelli と Kayla の 4 人家族で犬が 1 匹、猫が 2 匹いる家庭でした。お父さんは窓のガラスをはめる仕事をしていて、お母さんは交換留学のコーディネーターと Daycare の仕事をしていました。妹の Kelli は 1 つ年下の 17 歳で Kayla は 3 つ年下の 15 歳でした。Host family は今までにも留学生を受け入れたこともあり、私は 7 人目の留学生でした。でも日本人は初めてだったそうです。みんなとてもやさしくて本当の家族のように接してくれました。

学校もたくさんの友達ができ、本当に楽しい毎日でした。先生もフレンドリーでいつも助けて下さいました。最初の頃は宿題を終わらせるのが大変で、夜中まで起き



てやっていました。でもやればやるだけ結果もついてくるし、周りの人の助けもあり、乗り越えることができました。

学校生活の中でいろいろな行事に参加し、楽しい思い出がたくさんできました。



この約 1 年間の留学生活の中で学んだことは多く、自分でも自分が変わったことが実感できます。その中で一番感じたことは「感謝の気持ち」です。留学して、小さなことにも感謝するようになりました。日本にいる家族や host family、友達など、出会った人すべてに感謝の気持ちでいっぱいです。そして、いかに自分が周りの人に支えられているかということも実感することができました。

もうひとつ、なんでも 1 回やってみるものだなと思います。そう思うのは、「あの時にあれをやっていたから今これができるんだな」と思うことが多く、すべてがつながっているのだなとその時に気づきました。

アメリカに来て本当にいろんなことを体験し、そのすべてが宝物です。大変な時もありましたが、留学したことに後悔はしていません。むしろ留学したことを誇りに思っています。約 1 年、振り返ってみると本当に早かったです。無事に留学生活を送れたということに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

# アメリカ高校交換留学 (AYA) 特集

AYA2007-2008 参加者 保護者 先生 寄稿文 アンケート  
AYA2003-2004 OB 近況報告



## アメリカの家族の一員に

(AYA2007 参加者 大内麻琴 さんのお母様)

今日パソコンを開くとアメリカの家族からメールが届いていました。娘は明日アメリカを立ち帰国の途につきます。これが娘の近況を知らせてくださる最後のメールでしょう。そこにはコミュニティのミュージカルに出演している娘の写真が何枚も添付されていました。

この1年間何度となく娘の近況を知らせて下さった御陰で私たちは手に取るように娘のアメリカでの生活を知ることができました。そして、その度に我が子のように心配し、気づかい、深い愛情で娘を見守ってくださるアメリカのお母さんや家族全員の温かさを感じていました。



娘にとって留学の第1の目的、それは英語を話せるようになることではなくアメリカの家族の一人になることでした。最近のメールには別れが近づき娘も家族も泣いていると書いてありました。娘にとって、ともてとても大切なもう一つの家族ができました。それは1年で終わってしまうものではなく、これからずっと続いていく家族としての絆。

アメリカでの様々な体験により、留学とは単に言語を学ぶのではなく、どんな言葉であっても、一人の人として何を話し、何を伝えるのかを学ぶものだと感じたのではないのでしょうか。スポンジのように何でもすぐに吸収する若いこの時にこのような素晴らしい経験ができたことを親として心より嬉しく思うと同時にアメリカの家族、友人、近所の方々、学校の先生方やお友達の皆さんなど、本当に多くの方々に感謝の思いでいっぱいです。



## 最初は大変だったけど

(AYA2007 参加者 奥村彰太君)

「やっぱり楽しかったな」というのが終わってからの素直な感想でした。

僕はもともと英語の苦手を克服しようと留学を決めたので、英語があまり好きではなく、むしろ嫌いなほうでした。そのため留学直後から、自分の考えや気持ちを伝えることも出来ず、最初の半年は本当に地獄のようなものでした。最初の数ヶ月は会話もできず、授業も何をやっているかさえ解らず、サッカーのコーチの指示も理解できませんでした。他の人ならすぐに終わる宿題も2時間3時間かかり、毎晩3時に寝ていた週もあり、授業最後のプロジェクトなどで20時間パソコンにむかっていた週末もありました。それは、もうただ耐えるのみで、その頃は留学がいつ終わるのか数えてばかりいましたし、高校留学は誰にも推薦しないぞ、とも考えていました。

そんな辛い時期を乗り越えて頑張り続けることが出来たのは、事前研修で知り合った留学仲間のおかげだと思います。みんなもがんばっていたので自分だけ諦める訳にもいかない。となんとかやり抜きました。僕はホームシックには1度もかからなかったのですが、それも留学仲間と辛さを分け合ったおかげだったと思っています。そして初めの大変さにもかかわらずそれでも楽しかった



な、と今思えるのは最後の3,4ヶ月間がものすごく楽しくて思い出に残っているからです。

カリブにあるアルバにホストファミリーと一緒にバカンスに行つてのんびりしましたし、プロムにも2度行つ

# アメリカ高校交換留学 (AYA) 特集

AYA2007-2008 参加者 保護者 先生 寄稿文 アンケート  
AYA2003-2004 OB 近況報告

て踊りまくりました。ディズニーワールドにも行ってきました。最後の2ヶ月はほぼ毎週末パーティーがあって友達とはしゃいでばかりでした。その頃には英語も普段の会話では困らなくなり、冗談も気楽に言えたりして、自分の成長を感じることができてうれしかったです。もし途中棄権していたら…と思うとぞっとします。もし途中で辞めていたら英語もアメリカも嫌いで今もまだ辛いまま、自分の成長を感じることもなかったでしょう。

無事やりきった今はひとまわりもふたまわりも大きくなったと自信を持って言うことができます。今となっては高校留学を是非やり通すことをみんなに勧めたいです。誰でも最初はむちゃくちゃ大変です。でもそれを過ぎた後の楽しみと終わった後の自信や充実感は絶対に日本で普通に過ごす1年間では得られない物です。これから留学する人は覚悟しつつも楽しむつもりでがんばってください。初めが大変だから後がより楽しく過ごせるということをお忘れずに。楽しい留学生活になりますように！



息子が留学を決めたのは、留学を終えた息子の友達のお母様とお話していた時、「実は、僕も留学したいんです。」で、即決!! 私は、「えっ! そうなの? 2泊3日の旅行を決めるんじゃないんだから・・・それに大事な事忘れてない? あなた英語苦手じゃない。」それから、準備も一苦労。書類の作成やら、予防接種やら、事務的な事も全て本人に任せ、私達は、聞かれた時だけ助言する程度。そんな結構大変な諸手続きも社会勉強になったようでした。

そして夏休みが、始まるとすぐに、アメリカへ一人飛び立って行きました。私達が一番心配だったのは、どんなお宅にお世話になるのかという事です。お互い会った事も無いもの同士、言葉もまともに通じないのに、そこで一年間も一緒に暮らすのですから・・・。

そんな時電話で、「とても日本通のホストママだし、みんないい人だよ。」と教えてくれて、一安心したのを憶えています。それから、2、3週間に一度くらい電話で話したり、メールを送ってくれて、アメリカでの様子を知らせてくれました。電話から聞こえてくる声は、明るく、メールの内容も楽しそうだったので、いつしか不安も消

えていました。ホストママは時々メールで息子の近況を知らせてくれました。一緒に旅行に行った時や、食事をしている時等の写真を添えてくれ、その楽しそうな息子の笑顔も私達を安心させてくれました。

留学半ばになって聞いたのですが、最初はとても大変で、留学を後悔する程、勉強も会話も苦労していたんだそうです。しかしそんな事を私達に話しても愚痴になるし、心配させるだけなので、敢えて言わなかったとの事でした。それを聞いた時この子は確実に成長しているんだなあと感じました。

留学後半息子は本当に楽しそうでした。英語での会話もスムーズになってきたからでしょう。色々な面で余裕ができ、学校の行事、友達とのつきあい、家族とのふれあいに忙しそうでした。残された時間を貪欲に楽しもうとしている様でした。



そして無事帰国。一年ぶりに会う息子はなんだか大きく見えました。上手く言えませんが、より人に優しく、心配りのできる人間になって帰ってきた様に感じます。この一年、彼にとっては生涯で一番印象的な、また劇的な年だったことでしょう。日本では絶対に体験できない貴重な時間を過ごしたことで、たくさんの物を得たことでしょう。

親として留学中いくら困っていても手をさしのべる事はできません。彼を支えたのは本人の努力と周りにいる友達やホストファミリーのやさしさだけだったと思います。幸い周りの人々に恵まれ、助けられ、乗り越えられることができたのでしょう。もちろん本人も今までした事もないほどの努力をしたことでしょう。今私達は、そんな努力を重ね、確実に何かを得、成長して帰ってきた息子を誇りに思います。

またアメリカで息子の力になってくれた周りのすべての人々に感謝する気持ちでいっぱいです。そしてこの留学に際して手助けしていただいた先生方、導いてくれたI.Y.E.O.の皆様にとっても感謝しています。本当にお世話になりました。そして本当にありがとうございました。

# アメリカ高校交換留学 (AYA) 特集

AYA2007-2008 参加者 保護者 先生 寄稿文 アンケート  
AYA2003-2004 OB 近況報告

## AYA2007-2008 参加者・保護者アンケート調査

### ◆参加者アンケート

#### 1) AYA プログラムに参加して良かったですか？

##### またその理由は？

- A)非常に良かった. . . 67 %  
B)良かった. . . . . 22 %  
C)普通. . . . . 11 %  
D)悪かった. . . . . 0 %  
E)非常に悪かった. . . 0 %

- ・たくさんの人と出会い、色々なことを学べたので。
- ・自分が成長できた。
- ・人生の中でこれほど多くのものを吸収できたこの1年はすごい事だと思います。
- ・日本に関するプレゼンテーションを行うことが無く、個人的に友人に話すことしか出来なかったため。
- ・はじめが物凄く大変だった。その後は楽しくあっという間に過ぎてしまった。
- ・高校生活を体験できたのは良かったが、1年間では英語をきちんと話せるようになれなかった。

#### 2) 学校の授業で最も難しかった科目は何でしたか？

##### またその理由は？

- A)US History. . . . 56 %  
B)English. . . . . 22 %  
C)その他. . . . . 22 %

- ・覚えなければいけない単語が多かった
- ・教科書を読み、問題を解くのに時間がかかった。
- ・宿題も多く出て大変だった。
- ・教科書を読んで、自分の意見を発表しなければいけなかったため。
- ・教科書が難しく読めなかった。
- ・エッセイが大変だった。
- ・単語のテストが難しかった。
- ・知らない単語が多すぎた。
- ・課題のリサーチが多すぎて、睡眠時間が十分にとれなかった。

#### 3) 学校の授業で最も容易だった科目は何でしたか？

- A)代数学  
B)ダンス等体育系選択科目  
C)コーラス等芸術系選択科目

#### 4) 参加したクラブを教えてください。

水泳、陸上、テニス、サッカー、ボーリング、留学生クラブ、コーラス、ミュージカル、他

#### 5) 留学生活の中で最も印象に残った事は何ですか？

- ・Prom (卒業記念パーティー)
- ・Home Coming (母校を訪れる同窓会)
- ・毎週日曜日に教会に行ったこと。
- ・たくさんのショーでパフォーマンスをやり、拍手をもらったこと。
- ・学校での授業が日本に比べて、教えられるより、自分で調べたり読んだりすることが多い点。

#### 6) この1年間であなたにとって最も収穫だったと思えることは何ですか？

- ・少しだけ向上した英語力と新しい家族と多くの友達
- ・世界が小さくなった。行こうと思えばどこでも行けるし、友達を作ろうと思えばどこの国でも作れると思った。
- ・人間関係を少し深く知ることが出来た。
- ・人に迷惑をかけないよう心がけるようになったこと。
- ・英語力以上に母の大切さが分かったこと。
- ・英会話力
- ・たくさんの人に出会えたこと。

### ◆保護者アンケート

#### 7) 参加者の渡米中に1番心配されたことは何ですか？

- ・初期段階の語学力。
- ・ホストチェンジになり情報が混乱したこと。
- ・環境の違いによる体調変化。
- ・ホストファミリーとの意思疎通が十分ではないことがわかったとき。
- ・特になし。

#### 8) アメリカ高校交換留学にお子様を参加させて良かったですか？ またその理由は？

- A)非常に良かった. . . 86 %  
B)良かった. . . . . 14 %  
C)普通. . . . . 0 %  
D)悪かった. . . . . 0 %  
E)非常に悪かった. . . 0 %

- ・精神的に成長した。
- ・大切なもう一つの家族が出来た。
- ・様々な体験を話す娘を見て、成長し人間的に豊かになったと実感する。

# アメリカ高校交換留学 (AYA) 特集

AYA2007-2008 参加者 保護者 先生 寄稿文 アンケート  
AYA2003-2004 OB 近況報告

- ・ 目的を達成し、将来につながる経験であった。
- ・ 帰国後本人が「楽しかった」と言うので。
- ・ 頑張る機会を与えられた感がある。

## 9) アメリカ高校交換留学プログラムをお知り合いに すすめたいと思われませんか？ またその理由は？

A)はい. . . 86%

B)いいえ. . . 14%

- ・ 人間的な成長にとってこんなに影響力の大きなプログラムはざらには無いと思います。
- ・ 多くの高校生に体験して貰いたいから。
- ・ デスク担当者が信頼できるから。
- ・ このプログラムを若い時代に経験するのは人生を考える上で、とても良いことだと思うから。
- ・ 周りに留学を考える人がいない。



「獅子になって帰ってきます」 こんな力強い言葉を残し、アメリカへ旅立ったのが今からちょうど1年前でした。そんなカッコいい君から無事帰国の電話が鳴ったのはちょうど夕方の6時頃. . . その時間帯は英語レッスンの最中でもあり、本来は鳴っても出ない私なのですが、その時は何故か「電話に出なきゃ!」と。思わず取った受話器の向こうから聞こえてきた声は、ほんの少し大人に近づいた、そして堂々と落ち着いた声の君からでした。「奥村彰太です、帰ってきました。」と。

初めて彼に会ったのは1年半前、いや2年近く前になるでしょうか。多くの学生たちと関わる事が多い中、「この子なら大丈夫!」と直感的に思ったのが彰太君でした。自分の軸足で立てる子だというのは感じて取ることができました。そんな彼でも、アメリカでの学校生活スタートして半年近くまでは、言葉のスピードに慣れない、たくさんの勉強量についていけない、宿題に追われ、まともに睡眠が取れない. . . などなど辛くて厳しい日々の連続だったそうです。このプログラムを甘く見ていた、とも。ただ、振り返ってみてのひと事を聞かせて、との私の質問に彼はこう答えてくれました。「行って良かった!」、この言葉が最高の「おみやげ」です。

困難に出会ったら立ち向かえばいいのです。その数が多いほど人間を成長させてくれるものです。

そして何よりも10代というこの多感な時期に日本の外に身を置き、改めて自国を見つめてみる自分がいることにふと気づかせてくれ、そして普段はなかなか感じる事ができない、遥か太平洋の彼方にいる日本の家族の愛情を感じさせてくれる、そんなとても意味の深いものが、この留学プログラムだと信じています。

高校留学に夢を膨らませているみなさんは、全国にたくさんいることでしょう。アメリカ高校交換留学にチャレンジをする彼らが仮にマラソン走者であるとするならば、時に厳しい監督となり、時に一緒に走ってくれるコーチとなり、そして時に頼りになる先輩となってアドバイスをくれる人たちが、全国のIYEO各デスクで待っています。人と人との出会いは偶然ではないと思っています。今、会うべく人に会っているのだと思います。そしてあなたが次に会うべく人はアメリカにいるかも知れません。目標を高く掲げがんばってほしいと思います。走りすぎて喉が渴いたら、水を飲みに来てください。わたしはいつも給水ポイントに立っていますから。

昨年、自身も高校留学を終え、彰太君にバトンを渡した新海碧さんは、この7月にアメリカの大学へと旅立ちました。大きな目標を持っている彼女も夢の実現に向けてがんばってくれることでしょう。きらきら輝いている彼女の素敵な瞳が忘れられません。きっとアメリカの地で共に学んだ友との再会を果たすことでしょう。そしてこのバトン. . . 次は誰がしっかりと受け取ってくれるのか、楽しみに待つことにします。

最後に、私の大好きな歌詞の一部を、全国のAYAチャレンジャーのみなさんに送ります。

If we hold on together I know our dreams will never die.  
(Diana Ross / If we hold on together)



# アメリカ高校交換留学 (AYA) 特集

AYA2007-2008 参加者 保護者 先生 寄稿文 アンケート  
AYA2003-2004 OB 近況報告

## Reach Out

(AYA2003 参加者 吉澤光郎君)

2003年7月、高校3年だった僕は地元富山を後にし、アメリカ・オハイオ州の小さな街の高校へ留学した。英語には小さい頃から興味があり、機会があれば英語圏に旅行ないし留学したいと思っていた。金銭面の不安はあったが、僕は幸運にも奨学金をいただけることになり、それが引き金となって留学を決断した。

僕がいたオハイオ州 Cadiz は、人口数千人の本当に小さな街。3日もあれば噂が街を一周するような、典型的なローカルタウンだ。出身が富山の田舎であった為か、Cadiz の小ささに抵抗などは全くなかった。高校も1学年150人程と、ちょうど良い大きさだった。最初のうちは英語が未熟だったからだろうか、友達作りにも苦労した。でも、教会で知り合った同い年の子と学校でもつるむようになり、そこから友達の手は一気に広がった。



ホストファミリーと一緒に

しかけてくる人も多くいたし、そのお陰で、街で「あーあの Japanese boy ね〜」と覚えてもらうこともできた。逆に今住んでいるカリフォルニアでは、人種の垣根なのはいいが、「あいつはアジア人だから」とか、「こいつは FOB(Fresh Off the Boat)」などと、露骨なステレオタイプするのが悲しい。この意味で、アメリカに来た初期の段階で、違いを違いのまま受け入れようとする寛大なアメリカ人の一面を見る事ができて良かったと思う。

高校留学から帰国し、日本とアメリカ両国の高校卒業資格を入手出来た僕が進学先として選んだのはサンタモニカカレッジ (SMC) だった。この大学は UC・UCLA・USC に一番多く編入生を送り出していることや、授業のクオリティの良さで定評がある。留学生の数もコミュニティー

カレッジの中では群を抜いて多く、日本人だけでも800人近くいた。そんな中で、UC Berkeley や UCLA に編入しようと、A をかき集めるのに必死な人が多く、ここに於て初めて、競争社会・アメリカの現実に直面した。

ここでは、僕がオハイオの田舎で見た“高校・大学を出た後仕事(Blue-Collar jobs)につき、早く結婚して Big Family を築き、そのまま生まれ育った街で老いを迎える”という人生観が通用しない。SMC では、世界中、特に今日本を追い越そうと躍起の中国・韓国や東南アジア・インドの留学生が血眼になっている。それを横目に、多くの日本人留学生は、SMC 発行の I-20 を使い、LA で遊び呆ける毎日に現を抜かしている。ここでよく見受けられたのは、本当に自分で何もできない/やろうとしない日本人の多さ。アパート探しは愚か、家具の買い物から屋ご飯の準備まで、(親の)お金を誰かに払ってやってもらうというのが最近どんどん増えている。アメリカに来たばかりでまだ助けがいるのは分かる。しかし、必要最低限のヘルプは学校の留学生オフィスが提供しているし、ましてや他の国から来る留学生でそんな助けを要求する人は見た事もない。こういうところからも日本の“ゆるんだ”今日が見えてくる。

SMC で特に実感したのは、自分から reach out することの大切さ。アメリカでは、黙っていても誰も助けてくれない。困った事があつたら、しつこく他の人に助けを求めないといけない。例えば、UC などへ編入する為には、専攻によって全く違うクラスをとらなければならない。僕は、大学のアドバイザーと月に何度か会って、残りのセメスターにとるクラスを計画していた。そうしていたからこそ、Berkeley が“経済専攻の留学生の入学は秋から春に延期する”と決めた時も、アドバイザーからいち早く教えてもらい、それなりの対処ができた(違う専攻で願書を出し、秋に入学後に経済専攻に変更)。さらに、何度も通ううちに、オフィスの人と仲良くなり、そこで Student Assistant として働く事にもなった。

さらに、学校の理事会が留学生の生の声を聞きたいというので、僕ら Assistant 3 人が留学生 2500 人を代表して、それぞれの生活ぶりを話してきた。これがきっかけで、僕は Staff Development Day という、大学全体の研修会の日に、教授・職員全員の前でスピーチをするように依頼されてしまった。その日以降は、キャンパスを歩いても、いろいろな人から声をかけら



SMCの学長と

# アメリカ高校交換留学 (AYA) 特集

AYA2007-2008 参加者 保護者 先生 寄稿文 アンケート  
AYA2003-2004 OB 近況報告

れるようになった。ある日、道行く僕を突然警察官が追いかけてきて“I loved your speech!”と声をかけられた時には本当に驚いた。その後留学生の卒業記念夕食会でもスピーチを頼まれたり、大学の教授やスタッフ、理事会の人達と関わりを持つ仕事をする機会がいくつもあった。

SMCには、大学がスポンサーになって夏の間 Washington DC にインターンを送り出すプログラムがある。僕も応募したのだが、3万人余りの学生数から、50人の応募者があり、たったの4人しか受からない選考過程で、且つ留学生であるという不利な条件の下、合格の電話をもらった時の喜びは一入だった。アメリカという国には、Opportunityはいくらでもある。それを掴むかどうかは全て自分次第であり、どんなに小さな努力もいつか必ず大きなものへと繋がっていく。さもなくば、アドバイザーのオフィスでよく見かけたが、編入の願書提出直前まで自分が必要なクラスの存在すら知らずに、只々“Nobody has told me...”と繰り返すしかない生徒のようになってしまう。

DCでの夏が終わり、僕はUC Berkeley (通称 Cal) に編入した。Berkeleyは60年代の学生運動(Free Speech

Movement)発祥の地として有名で、今でも学校にはリベラルな雰囲気漂っている。最近では、次期大統領にはObamaを！とさかんに運動する生徒でいっぱいだった。ヒッピー文化も強く根付いている。

最初にCalに来た時は、大変なところに来てしまったなと思った。授業の内容が難しいのはもちろん、ここの生徒はみんなが賢い。ここは、自分の勉強する分野が好きで好きでたまらないという人のたまり場だ(オタクの集まりとも言えるが…)。授業中、たくさんの生徒が意見を言うが、その一つ一つのレベルが非常に高く、ベテラン教授だって答えに困ることもよくある。

一年間Calにいて思うが、努力をせずに結果を迎えること程悲しい事はない。最初の学期の期末テスト前に、一人の教授からこんなのがメールされた—“I know the pressure this time of year is to think that everything rides on how you do on your finals. … Do your best. Be proud of the effort you put in, regardless of its result. Your time at Cal is about learning and growing and changing and thinking new thoughts and having insights and now and then having a WOW experience. It's not about the grades.”

この時はまだCalでの期末テストというものを受けた事がなく、不安で不安で仕方がなかった。なので、がむ

## ～ UC Berkeley こぼれ話し～

### (1)深夜の図書館で繰り上げられる伝統行事

Calにいと、自分の勉強意欲も自然に高まってくる。期末テスト期間中は、24時間オープンな図書館に缶詰になり、朝までぶっ通しで勉強というのが当たり前。そんな中 Calらしいのは、期末週間中のある深夜頃に、100人程が突如全裸で現れ、図書館中を走り回るといったイベントが毎学期ある。成績の事で頭がいっぱいになる頃に丁度良い気分転換になる。



### (2)ルービックキューブで単位がもらえる

CalにはDeCal (Democratic Education at Cal) という授業がある。これは一般のクラスのように教授が生徒を教えるのではなく、生徒同士が自由なトピックの基で集まり、互いに教え合うという形式のクラスだ。あくまで、一部の生徒が“先生”になることはなく、何人かの生徒が“facilitator”としてクラスを引っ張っていく。クラスのテーマは100以上あり、ルービックキューブDeCalやクッキングDeCal、さらには、“The Simpsons DeCal”というのまである。成績は従来のように評価されるのではなく、Pass/Non-Passベースで、単位をとるか落とすかというだけ。しかし、DeCalの単位もしっかりと卒業に必要な120単位の一部として使える。今、僕と韓国・中国出身の友人同士で、“East Asian Culture DeCal”のようなものを始めようと計画している。ここBerkeleyで一番多い人種は白人ではなくアジア系だ。でもその殆どは、Chinese-AmericanやKorean-Americanなど、アメリカ生まれだ。彼らは、自分のルーツである中国・韓国・日本の文化をあまり知らない。そこで僕たちは、東アジア出身なのを生かして、その地域の生の文化をDeCalで紹介していきたいと考えている。

## アメリカ高校交換留学 (AYA) 特集

AYA2007-2008 参加者 保護者 先生 寄稿文 アンケート  
AYA2003-2004 OB 近況報告

しやらに教科書を読み返したり、Study Groupに参加したり、TAに質問しに行ったりした。成績などを気にしている余裕はなく、とにかく少しでも多くのことを頭に詰め込むのに精一杯だった。テスト中もとにかく必死だった。その結果、僕がもらった評価はA。教授の言った通り、努力をしたからこそ、この結果に満足することができた。そして、努力には、それなりの成績がついてくることがわかった。先学期、行動経済学で僕はA-をとってしまった。それでも、精一杯努力した後についたA-だったので満足している。これからは、これ以上A-を増やさないようにもっとがんばらばいいだけだ。

今年の夏、僕はサンフランシスコでインターンをしている。海外の会社にとって日本は文化の違いが激しく、非常に進出しにくい市場だ。今僕が働いている会社は、その文化的バリアーをなんとか克服できるようにと、架け橋的な役割の仕事をしている。日本で育ち、アメリカの田舎と都市部の両方を見てきた自分の経験は、今の仕事で非常に役立っている。アメリカに大学から留学する日本人は大勢いるが、高校時代から、しかも日本人のまだないピュアな田舎のアメリカを経験する留学生はまだまだ少ない。オハイオで過ごしたのはたった1年間だったけれど、その時に見て聞いて感じた事は今の自分の重要な一部となっている。スケジュールがきつくなるが、このインターンは次の学期中も続けようと思っている。どれだけ自分を追い込めるか、試してみたい。

5年前の夏、地元のローカル線の駅で、僕を見送る母の頬には涙が流れていた。母の泣く姿をはっきりと思い出せるのはこの時くらいだ。その時の母には、僕がそれからずっとアメリカに行ってしまうことはわかっていたのだろうか。少なくとも僕は、一年で帰ってくる気でいた。しかし、結果的に遠く離れた地に長居する事になり、経済的にも精神的にも負担をかけてしまっている。それでも、じっと我慢し、僕を心から支えてくれている両親・家族にはどんなに感謝してもきれない。

アメリカに来て一番大きく変わったのは、自分の家族に対する思い。日本にいただけではこんな風に感じられなかっただろう。

今の願いは、早く自立して家族にお返しをしていくこと。その為にも、今自分に与えられた事をしっかりこなしていこうと思う。



写真

2008年夏休み一時帰省中の富山にてボランティア  
アメリカ人留学生への邦楽指導を通訳

## 編集後記

2008-2009 アメリカ高校交換留学 (AYA) 生たちが7月20日、8月7日に元気に出発しました。英語での生活に戸惑いながらも、毎日頑張っていて過ごしていることでしょう。今回、原稿をお寄せ頂いた AYA の OB,OG またご関係者各位におかれましては、お忙しい中ご協力ありがとうございました！これまでの OB,OG に負けないように、今年の参加者も大きく成長して帰国することを期待します。IYEO News Avenue では、これからも異文化交流にかかわる様々なニュースを取り上げてゆきたいと思っています。皆さん応援&ご協力どうぞよろしくお願いいたします。Soramame・Sai・May

季刊誌 「IYEO News Avenue Vol.13」 2008年9月29日号

発行 青少年異文化交流推進協会

〒730-0052 広島市中区千田町 2-1-2 TEL 082-246-9400 FAX 082-243-1849

URL : <http://www.iyeo.org> e-mail : [info@iyeo.org](mailto:info@iyeo.org)

編集 畑俊行 (IYEO 大阪) 岩下小百合 (IYEO 福岡) 八木ゆう子 (IYEO 広島)